デサ・サングラ・アグン（インドネシア・マドゥラ島）における住居 および集落の空間構成

SPACE FORMATION OF THE MADURESE SETTLEMENTS (DESA SANGGRA AGUNG) IN MADURA ISLAND, INDONESIA

山本直彦*, 布野修司**, 脇田祥尚***, 三井所 隆史****

*Naohiko YAMAMOTO, Shuji FUNO, Yoshihisa WAKITA
and Takashi MIISHO*

The purpose of this paper is to analyze the principles of space formation of Madurese houses, house compounds and villages. In Indonesia, many settlements of Proto-Malay tribes like *Batak*, *Toraja* are formed as parallel disposition pattern. Madurese settlements also follow the same pattern. Compared to the settlements of other tribes, Madurese settlements are significant as a prototype because they realize that pattern in the smallest scale. It is also pointed out that Javanese and Balinese settlements in pre-Hindu period followed the same pattern. The analysis on Madurese settlements might reveal the basic rules of space formation of the settlements in Indonesia.

This paper firstly tries to grasp the settlement patterns in rural regions in Madura Island. After looking at all the regions in Madura Island, *Sanggra Agung* is chosen to be surveyed more specifically. Judging from the result of the survey, it is concluded that Islamic influence has played an important role to keep indigenous space formation system of Madurese settlements particularly in western Madura.

Keywords: Madura Island, Desa Sanggra Agung, parallel disposition pattern settlements, Islam, Indonesia

マドゥラ島、デサ・サングラ・アグン、平行二列対面型配置、イスラーム、インドネシア

1. はじめに

1-1 研究の背景・目的

本稿では、インドネシアのマドゥラ島の住居および集落を対象として、その空間構成の原理を、主として生活行為と居住空間の関係に着目することによって明らかにすることを目的とする。

マドゥラ島は、マドゥラ海峡を介して、東部ジャワの北部沿岸地域と向かい合う位置にある（図1）。マドゥラ人は、インドネシアで、ジャワ人、スダ人¹⁾に次いで3番目に多い人口を擁し、諸民族の中でも、特に熱心にイスラームを信仰することで知られる。

インドネシア島嶼部には、パタック・トバ、トラジャ、ニアス島の例のように主屋あるいは穀倉、釜屋、家畜小屋などの付属屋²⁾が、中庭を介して平行に並ぶ平行二列対面型³⁾の住居配置が広く見られるが、マドゥラ島の住居も同様の構成をとる。マドゥラの平行二列対面型の構成は、ごく近い血縁者のみが居住する個々の屋敷地において見られ、他民族の場合と比較すると、最も小規模な形式といえる。マドゥラ島の住居は、平行二列対面型の住居配置のひとつの原型を保持してきた可能性があり、インドネシアにおける住居の基本的な構成原理を考察する上で重要な事例と考えられる。

また、マドゥラ島に隣接するジャワ島やバリ島の住居は、ヒンドゥー文化の影響を受けていることが指摘される。そしてR. タン

⁴⁾は、ヒンドゥー文化が持ち込まれる以前のバリの土着の集落が、村の寺を頂点に持つ平行二列対面型の住居配置を持っていたことを指摘している。東部ジャワのモジョクルト Mojokerto では、マジャパイト王朝最盛期の14世紀後半の寺院遺跡から、平行配置される住居群が彫られたレリーフが発掘されている。マドゥラ島の住居配置は、こうしたかつてジャワやバリに見られた住居配置と、大きく関係すると考えられる。また、ジャワ、バリ、ロンボクとマドゥラの住居は東南アジアで例外的に、土間式であるという共通性を持っている。マドゥラ島の住居についての研究は、ジャワ、バリを中心とした周辺諸島の既往の住居研究にとっても極めて重要である。

1-2 研究の方法

まず既往の研究⁵⁾をもとにマドゥラ島全域を踏査し、適宜選んだ計17集落⁶⁾において、住居平面と構造を確認し住居配置の実測を行った。これをもとにマドゥラ島の住居および集落の地域類型を明らかにした。この地域類型の抽出は、本研究の成果のひとつである。

次に、その地域類型に従って選定した典型的な集落であるデサ・サングラ・アグン Desa Sanggra Agung（および比較対象として選定したデサ・グル・グル Guluk Guluk）に住み込み、より詳細な調査を行った。その内容は以下のようなものである。

1)集落配置図の作成：住区の範囲で配置図を取り、これから屋敷地

* 京都大学大学院建築学専攻 大学院生・工修

** 京都大学工学部建築学科 助教授・工修

*** 島根女子短期大学 講師・工修

**** 京都大学大学院建築学専攻 大学院生

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng. Lecturer, Shimane Women's College, M. Eng.

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Kyoto Univ.

図1 マドゥラ島の位置

の平面構成を類型化し、聞き取り調査を行う屋敷地を選定した。

2)生活行為と居住空間の関係を中心とした聞き取り調査:まず家具配置を含む住居平面図を取り、家族構成を把握した上で、各主屋と付属屋の所有関係と相続関係を調べた。さらに就寝、食事、礼拝、接客を中心に、それぞれの生活行為が、性別による違いを含めて、住居のどの部分で行われるかを調べた。また、補足的に各棟の建設年代と建設組織についても聞き取りを行った。

3)住居断面図の記録:典型的な主屋、付属屋の構造について、部材名称の聞き取りと詳細な実測を行った。尚、本稿で述べる部材、室、棟などの名称は、すべてマドゥラ語である。

1994年10月4日～25日に地域類型調査と住み込み予備調査、1995年9月9日～10月8日に地域類型の補足と住み込み本調査を行った。

2. マドゥラ島の住居、屋敷地および築落の構成と地域類型

2-1 築落構成単位としての屋敷地および屋敷地内の住戸構成

マドゥラ島の集落については、田中則雄⁶⁾が、C.v. ファレンホーヘンとクントウィジョヨを引いている。

C.v. ファレンホーヘンは、ジャワ・マドゥラの集落を分類するなかで、ジャワの集落は、生垣と樹木に包まれ田畑の中に巨大な浮島のように存在し、単一の村落を形成しているのに対し、マドゥラの集落は「地域的な統一体と言うよりは、孤立した屋敷地の集合体か、小集落の集合体にすぎない」としている。また、クントウィジョヨは、マドゥラの集落は「小さな単位で散在し散村の形態をとっている。人々は村落の中で生活しているのではなく、壁または簡単な柵で囲まれた屋敷の中で、血縁の4、5戸の核家族の小グループを中心に生活している」と述べ、集落内の屋敷地の独立性の高さを指摘している。⁷⁾さらにクントウィジョヨは、こうした散村的な形態をとる原因として、マドゥラ島の畑作中心の生態条件を挙げる。自然条件が厳しく水田耕作が難しいマドゥラでは、生業の中心は畑作である。そのため各戸は、それぞれの耕地と家畜を持つ。つまり、水田耕作に関わる水利組織などを持たないマドゥラの集落は共同体として組織される必要がなかったとされるのである。

また、宮本謙介は、集落間の結合も比較的ルースであり、その理由として、かつて各耕地が上級支配者層の封土として組み込まれていたことを指摘している。⁸⁾

マドゥラ島の集落が、独立性の高い屋敷地を基本的な構成単位としていることは、以上からおおよそかえるであろう。

マドゥラ島は、西から東へパンカラン Bangkalan、サンパン

図2 ランガル平・断面図

Sampang、パムカサン Pamekasan、スムヌップ Sumenup の4つのカブパテン kabupaten(県)に区分されているが、島全体を踏査した結果、屋敷地レベルで平行二列対面型の住居配置を持つことは、島全体に共通した特徴であることが分かった。平行二列対面型の住居配置をとらない唯一の例外として、東部のデサ・ピンギール・パパス Pinggir Papas があるが、これについては後述したい。多くの場合、屋敷地は、生垣や柵によって区画されており、境界に沿って竹、果樹などの屋敷林が作られている。分棟式の住居に挟まれた中庭は、タネアン tanean と呼ばれ(規模の大きなものはタネアン・ランジャン tanean lanjang)、東西に長くのびている。分棟式の住居の最も基本的な構成は、屋敷地北側に中庭に南面してロマ・トング roma tonggu (主屋)、南側に中庭に北面してダポール dapor (釜屋)、カンタン kantang (家畜小屋)などの付属屋が建つ。これらは全て土間式である。中庭の西端に建つランガル langgar (礼拝棟:図2)は、マドゥラ人の住居に独特なものであり、付属屋のうち例外的に高床式である。

2-2 マドゥラ西部の主屋形式

屋敷地の構成においては、原則的にマドゥラ島全体に共通の特徴が見られるが、主屋の形式と付属屋の種類には地域差がある。マドゥラ西部の主屋は、まず屋根形式によって、トロンプesan trompesan (切妻)と blimbingan⁹⁾(寄棟の四周に下屋を付加したもの)の二種類が区別される(図3)。前者がより古いとされるが、その構造は小屋組を除くと同じである。パンパン・ラジャ pangpang raja と呼ばれる4本の柱の頭部が、ランパラン lamparan (桁)とブングアン bubungan (梁)でつながれ、さらにその下に貫が入れられる。この部分が小屋組を支える。下屋は構造的には独立したペアンベッ pe'ampek (垂木受け)とパンパン・クニ pangpang kuni (垂木受けを支える柱)によって支えられる。

さらにマドゥラ西部の屋根形式に特徴的なのは、複数棟の主屋が下屋部分で桁行き方向に連結されることである。最も一般的なのは、二棟が連続する場合で、ポトンガン potongan と呼ばれる(図4)。また三棟以上が連続する場合もあるが、これは切妻の屋根形式を持つ主屋の多く残っているサンパン県に見られる。

主屋の平面構成は平入りで、きわめて単純である。中庭に面した主屋前部のアンペル amper (テラス)とクナンガ・テドン konanga tedhung (文字どおりの意味は寝室)からなる。ポトンガンの場合、アンペルも連続する。二棟の間の空間は室内化されており、ガン gang と呼ばれ通常は倉庫または小寝室として使われる。

マドゥラ島に特徴的な家具として、レンチャック lencak が挙げられ

図3 トンベ・サン(左)・リンビン・ガン(右) 平・断面図 図4 ホ・トン・ガン 平・断面図 図6 プント・ホ 平・断面図 図5 バンサル 平・断面図

図7 ブンドボと主屋がクラスター型に配置される屋敷地
(スムヌップ県グル・グル郡デサ・グル・グル)

る。これは一畳ほどの大きさの露台であり、主にアンベルに置かれる。土間式住居での日常生活において高床の生活面を確保する重要な家具である。また主屋内にはレンチャック・パレlencak palek(ベッド)とロマリlomari(棚)が置かれる。

2-3 マドゥラ東部の主屋形式、ブンドボ

マドゥラ東部の主屋はジャワと共通の屋根架構を持つ。¹⁰ ジャワのジョグロjoglo(急勾配の寄棟の四周に下屋を回した屋根型の住居)にあたる住居が、マドゥラ東部ではバンサルbangsal¹¹(図5)、リマサンlimasan(寄棟型)にあたる住居が、ペグンpegunと呼ばれる。前者は後者より格式が高いものと考えられている。パチェナンpacenan(切妻型)は、マドゥラ東部では通常付属屋にしか用いられない。主屋が複数棟建つ場合、それぞれは独立し、主屋平面がマドゥラ西部のように連続することはない。

架構、部材名については、ほぼジャワの場合と同じである。中心となる4本の柱はササカsasakaと呼ばれる。ササカの頭部はランバンlambang(梁・桁)で連結され、その下にソンドゥッsonduk(貫)が入れられる。この架構の中心部分全体で、コルビkorbiと呼ばれる。

バンサルの場合、ランバンの上に、トンパン・サリtompang sari

と呼ばれる特徴的な部材が、外側に持ち送られながら井桁状に重ねられ、この上に小屋組と下屋の垂木が乗る。この段数が多いほど主屋の格式が高いとされる。ペグンの場合はこの部材を持たない。

主屋平面は西部と同様に平入りで、アンベルと間仕切りのない室内空間からなる。アンベルには机や椅子が置かれ、椅子座の浸透が見られる。平面構成の点では、マドゥラ東部とジャワは大きく異なる。マドゥラ東部の場合には、ジャワでソントン・トゥンガに当たる聖なる空間が欠如しているのである。¹² マドゥラ東部では、主屋平面内で、奥の壁を背にした向きで右(kanan)左(kacer)が認識されている。また主屋の奥側がロオロlo'olo(川の上流を示す集合名詞)と呼ばれる。¹³

東部の集落に特徴的な付属屋として、従来ジャワの住居に固有の付属屋と考えられてきたブンドボpendopoがある(図6)。バンサルやジョグロと同じ架構を持つことと接客棟であることは、ジャワとマドゥラで共通しているのだが、マドゥラの場合に特徴的なのは、複数のブンドボと主屋が、中庭を介して対面するように平行二列対面型に配置されることである(図7)。ジャワでも一部に平行二列対面型の配置が報告されているが、一般には単独で、ブンドボ、主屋の順に、ともに正面を南向きに一直線に配置されると考えられている。¹⁴

他の付属屋の持ち方は、基本的にマドゥラ島全体の特徴に一致する。しかし、マドゥラ西部では原則的な配置が、ほぼ必ず守られる一方で、しばしばマドゥラ東部ではランガールを欠いたり、主屋後部に釜屋が付設される例が見られる。

2-4 デサ・ピンギール・パパス

デサ・ピンギール・パパスはスムヌップ県カリアンゲットKalianget郡(クチャマタンkecamatan)の最南端に位置する漁村である。もともとマドゥラ人の土着の集落であったが、後にバリの王国の軍隊やイスラーム教を伝導したジャワの導師らが、住み着いたと言われる。¹⁵

図8はカンボン(集落の下位単位)・アグンのRT8(RT:Rukun Tetangga, 隣組)の西端部の配置図である。この集落の特徴は、南北に細長い宅地割りである。この宅地割りに従い屋敷地内には、前から順にブンドボ、主屋、釜屋が互いに中庭をはさんで、直線状に配置される。これはマドゥラ島全体に共通した東西に長い平行二列対面型の住居配置とは大きく異なり、むしろジャワに一般的な配置である。主屋はマドゥラ東部に見られるバンサルであるが、その呼称は異なり、ピンギール・パパスではコンディkondiと呼ばれる。¹⁶ さらに入口の向きによって名称が区別され、入口が屋敷地の北側の場合は「ブ

ンドボ」南側の場合は「ムンハダップ menghadap」と呼ばれる。ムンハダップの文字とおりの意味は「面する、向かい合う」である。主にRTの南半分の屋敷地が海に面するためと考えられるが、その別の意味に「会う」があることを考えると、南から入る向きは、外来者がその家の者に「会う」向きであると解釈もできる。

2-5 地域類型

マドゥラ島の住居および集落は、屋敷地を構成単位とし、平入りの住居が平行二列対面型に並ぶ点で共通するが、主屋形式に着目すると、パムカサン Pamekasan 県を境界に、バンカラン Bangkalan 県・サンパン Sampang 県を中心とした西部と、スムヌップ Sumenup 県を中心とした東部に大きく地域分類できる(図9)。西部はマドゥラ島に特有の主屋形式を持つものに対して、東部はプンドボの存在を含め、ジャワと共通の住居形式を持つ。ピンギール・パパスの住居配置はマドゥラ島では特殊な事例であり、むしろジャワの住居配置と比較してみる必要があると思われる。¹⁷⁾

3. デサ・サングラ・アグンの空間構成

1858年にオランダ植民地政府が、直轄領としてパムカサン侯国を編入し、さらに1864年にバンカラン侯国からサンパン県を分離する以前は、マドゥラ島は西部のバンカラン、東部のスムヌップの両侯国が強い支配力を持った。先に指摘した地域類型は、ほぼ、この侯国の支配版図と一致する。そして当時、マドゥラとは、この西部のバンカラン侯国を指した。以下において、マドゥラ島に固有の主屋形式が見られる西部の集落から、特に複数の主屋を持つタネアン・ランジャンが多く見られるデサ(村)・サングラ・アグンを選び、その屋敷地の平面類型、生活行為と居住空間の関係について考察する。

3-1 集落の概要

デサ・サングラ・アグンは、マドゥラ西部のバンカラン県ソチャ Socah 郡にある。デサ全体は、下位行政単位である7つのドゥスン dusun (住区)¹⁸⁾からなる。そのうちデサの中心部にあるドゥスン・サングラ・アグン・トゥンガ(図10)の一面には、マカム・レンボン Makam Lempong と呼ばれる集落全体の共同墓地(図10:A)がある。墓地の中心部には、一組の屋根を持つ特別な墓がある。これは

図8 ピンギール・パパス RT8 西端部配置図

デサを開いた先祖である女性の墓であるという。この先祖の屋敷地(図10:B)は、同ドゥスンに現在もあり、直系の子孫であるハジ・マニサー Haji Manisah と呼ばれる女性が住み続けている。つまり、デサは、同ドゥスンを中心に発展してきたのである。

以下で分析の対象としたのは同ドゥスン内から選定した屋敷地28事例(図10に番号を記入した屋敷地)である。

3-2 屋敷地の平面類型

図11は、主に主屋および釜屋の位置に着目し、屋敷地を規模により分類したものである。付属屋のうち釜屋に着目するのは、その位置と数が屋敷地の規模の拡大と関係があると考えられるからである。

最も小規模な屋敷地は、中庭西側にランガール、北側に主屋、南側に釜屋および家畜小屋からなる(stage1)。

次に考えられるのが、付属屋のうち釜屋が、主屋西側(ランガールの北側)に移動した段階である(stage2)。この段階で本来釜屋のある位置が空地である2a型、また、家畜小屋を持たない場合、南側が全く空地である2b型の例がある。敷地に余裕のある比較的小規模な屋

西部型の例:デサ・アラン・アラン(バンカラン県トラガ郡)

東部型の例:デサ・ガブラ・バラット(スムヌップ県ガブラ郡)

図9 地域類型と類型例

敷地でも、主屋西側への釜屋設置例が見られるが、その理由のひとつには、屋敷地北西に位置する井戸と釜屋の距離的な近さがもたらす水回りの便の良さが挙げられる。

マドゥラ島では、一般に屋敷地内に住む世帯数が増え、主屋を増築する必要がある場合、新しい主屋は古い主屋の東側に建てられる。その結果、中庭北側半分に主屋が並び、南側半分に付属屋が並ぶ。しかし、デサ・サングラ・アグンの場合、こうした屋敷地は少ない。中庭北側に主屋が一棟の小規模な屋敷地でも、すでに南側にも主屋が見られる (stage3)。3a型は、南側に家畜小屋を残しており、2a型から最も自然に南側に主屋が建てられたものと考えられることができる。3b型は、すでに牛小屋などの比較的規模の大きな家畜小屋を持たない場合であり、2b型の空地が建て詰まった場合と考えられる。3c型は、屋敷地の南側に主屋を建てる際に、家畜小屋が主屋の裏庭側に移されたと考えられる事例である。最も基本的な構成を残した3a型と同様に多く見られるパターンが3d型である。この場合、家畜小屋はランガールの南側に設置されている。

主屋がさらに建設され、屋敷地の規模が拡大すると、しばしば東端に2番目の釜屋が建設される (stage4)。

以上のように、屋敷地の構成は、主屋や付属屋の配置に着目すると、屋敷地の拡大過程と対応しながら、4段階に分類できる。

3-3 家族構成と住居の所有関係

屋敷地内には拡大家族が住むが、複数の主屋のそれぞれには核家

族単位で居住する。一般に、マドゥラ島では妻方居住婚が行われ、結婚後も屋敷地内に留まり主屋を相続するのは女性だとされる¹⁹。調査事例では全主屋の3割弱に当たる51例中14例が男性によって相続されており、必ずしも女性によるわけではない。²⁰しかし、西側の最も重要な主屋であるポトンガンを相続、またはそこで親と同居するのは、実に16例中14例が女性 (娘夫婦) であった。ポトンガンに限れば、その相続は女性によると考えられる。

原則として主屋の配置順序は、世代順および同世代内では長幼順に西から東へ並ぶ。判断可能な屋敷地17例²⁵のうち、7例が、図12に示すように、こうした基本パターン (A) を守っていた。

その他の屋敷地では、世代または同世代内の長幼関係と主屋配置が部分的に逆転するパターン (B) が見られる。親子間での逆転 (B1) が3例、(兄弟) 姉妹間での逆転 (B2) が2例 (重複は1例:B3) である。姉妹間の逆転が起こる場合、注意したいのは、しばしば、年離れた親世帯が、ランガールに住む例があることである。多くの子供が結婚し独立した主屋を必要とするようになると、親が自らの主屋を明け渡すのである。早く結婚する長子世帯などは、当初別棟に住み、親が死去し主屋が空いた後、または第二子以降の世帯のために主屋を明け渡した後も、当初の棟に住み続ける場合があることが、部分的な逆転の起こる大きな原因と考えられる。

付属屋の所有関係が大きく変化するのは、屋敷地の規模が拡大し、釜屋が二棟になるパターン (C) である。これは図11のstage4の場

図10 ドゥスン・サングラ・アグン・トゥンガ配置図

合だが、居住者の家族構成と釜屋の所有関係を見ると、二通りの場合がある。居住者全員が血縁関係で結ばれる場合（C1）と血縁関係の意識されない二つの大家族が住む場合（C2）が、それぞれ2例見られる。後者の場合、中庭をはさんで向かい合う棟と棟が、ひとつの家族により所有され、屋敷地が東西に分割され所有されている。

図 11 ドウセン・サングラ・アグン・トゥンガ屋敷地平面類型

3-4 生活行為と居住空間の関係

就寝、食事、接客、イスラームの礼拝といった生活行為が、住居のどこで行われるかについて、世代と性別に注意し見てみたい（表1）。

1) 就寝 核家族ごとに、それぞれの主屋内で就寝するのが一般的であるが、特徴的なのは、ランガールが利用される場合があることである。ランガールで就寝する者には、年齢や性別により、大きく二つの層がある。上述した子供世帯に主屋を譲った親（6例）と未婚男子（8例）である。未婚男子の場合、10歳ごろから家族と離れてランガールで寝ようになる。つまり、ランガールは主屋に寝場所のない者を吸収する役割も果たす。また男性の訪問客もランガールに泊まる。²²

2) 食事 食事の場所については、ばらつきがあるが、いくつか特徴的な点を挙げると以下のようなものである。

・男女が別々の場所で食事をする例が見られる（7例）。男性がランガールで女性がアンペルで食事する例、男性がランガールで女性が釜屋内で食事する例などがある。

・祖父母などの老人が、他の家族と離れて食事をする傾向がある（5例）。家族内で、祖母のみが釜屋で食事をする例、祖父のみがランガールで食事をする例などがある。

全体の特徴として、主屋内で食事をする例は、レンガ造の主屋の居間が多く、伝統的な木造主屋内で食事をする例はほとんどない。

3) 接客 伝統的な木造主屋には居間がないのに対し、新しいレンガ造の主屋には、居間を持つものがある。

木造主屋の場合、接客の行われる場所は、ほぼ共通している。男性客の場合はランガール、女性客はアンペルのレンチャックである。

居間を持つレンガ造の主屋でも、その約半数では木造主屋と同じ接客の仕方である。一方で居間が利用される場合も、女性客に限って居間でもてなされ、男性客は必ずランガールでもてなされる。

つまり、居間を持つレンガ造の主屋に建て替わっても、基本的には木造主屋での接客の仕方が受け継がれていると考えられる。

4) イスラーム教の礼拝 マドゥラ人はインドネシアでも敬虔なイスラーム教徒として知られる。全体の9割以上の屋敷地でランガールで礼拝を行う。男女の性別にかかわらずに、特に注意したい。

図 12 家族構成と住居の所有関係

3-5 デサ・グル・グルにおける生活行為と居住空間の関係

地域類型を基にした比較を行うため、マドゥラ東部の集落・スムヌップ県グル・グル郡デサ・グル・グルを取り上げてみたい(表2)。

デサ・サングラ・アグンでは、生活行為が行われるのは、ランガールを中心とした付属屋や主屋前部のアンベルなど中庭回りの空間においてであった。一方で東部では、上述したようにランガールを欠くなど、付属屋の持ち方が異なる場合がある。その場合、生活様式が異なることが予想されるのであるが、調査事例から見ると以下のようである。特にランガールの有無に注意して、生活行為と居住空間の関係を見たい。調査事例として、ランガールを持つもの7例(屋敷地番号1,3,5,6,7,12,13)、持たないもの8例(屋敷地番号2,4,8,9,10,11,14,15)、合計15の屋敷地を選んだ。

1)就寝 核家族単位で、それぞれの主屋で就寝するのは、西部と同じである。しかし大きく異なるのは、ランガールで就寝する者が、ほとんどないことである。西部とは異なり、老人も必ず主屋内で寝起きする。未婚男子のランガールでの寝起きも見られない。未婚男子の隔離就寝には、主屋に単独で寝起き(3例)、釜屋で寝起き(1例)、

表1 デサ・サングラ・アグンにおける生活行為と居住空間の関係

1) 就寝場所		
就寝者	就寝場所	屋敷地番号
未婚男子	ランガール	2,5,8,9,10,15,20,21,25,27,28
未婚男子	木造主屋	11,20
未婚男子	ランガール	12,13
未婚男子	アンベル	11,20
老人	ランガール	1,9,10,15,19,21,23,27
老人	アンベル	5
女性	釜屋	19,27

2) 食事場所					
屋敷地	ランガール	釜屋	アンベル	主屋内	男女分離
1	祖父母			夫妻・息子・娘	
2				全員	
3			祖母		
4			祖母		
5	全員				
6		夫妻	夫の姉		
7			全員		
8			全員		
9	祖父・全員	全員	全員		
10	祖母・夫妻・息子・娘	祖母・舅			
11	全員				
12	夫・息子	祖母	妻・娘		●
13	夫・息子	妻			●
14	夫・息子	妻			●
15	祖父母・父		妻・娘		●
16		全員	全員		
17			全員		
18	父・息子	妻			●
19	祖母・夫妻・息子・娘	曾祖母			
20	全員(昼)		全員(朝)	全員(晩)	
21	夫妻・娘	祖母・夫妻・息子			
22	祖母・夫妻・娘	祖母・夫妻・娘	祖母・娘		
23	夫妻・娘		娘		
24	息子	祖母	夫妻・息子	娘	
25	全員				
26	夫		妻・娘		●
27	夫・息子		妻・娘		●
28	全員		全員		

3) 接客場所			
男性接客場所	女性接客場所	屋敷地番号(主屋・居間なし)	屋敷地番号(主屋・居間あり)
ランガール	アンベル	3,4,7,8,9,10,11,12,14,15,16,17,20,21,22,26	1,5,19,24
ランガール	ランガール	6,23	18,25,27
居間	居間		13
ランガール	居間		2,28

4) 礼拝場所		屋敷地番号
男性礼拝場所	女性礼拝場所	
ランガール	ランガール	1,2,3,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22,23,24,26,27,28
居間	居間	25
寝室	寝室	4

レンガ造の主屋の寝室で従兄弟同士で寝起き(1例)の例がある。

2)食事 釜屋内で食事をする例が、ほとんどである。主屋後部に専用の釜屋が設けられる例が、しばしば見られるのだが、釜屋の共用、専用に関わらず、食事は釜屋でとられる。その結果、西部のようにランガールなどの半戶外空間を利用したり、男女が違う場所で食事をする傾向はない。専用の釜屋があるため、性別というより、むしろ核家族ごとに分かれて食事をしている。

3)接客 ランガールのある屋敷地では、大きく二つの場合がある。男性がランガール・女性がアンベルの場合(3例)と男性がアンベル・女性が主屋内の場合(3例)である。

ランガールのない屋敷地では、男性がアンベル・女性が木造主屋内またはレンガ造主屋の居間でもてなされる場合が多い(5例)。一方で男女とも同じ場所の場合もある(アンベル2例、主屋内1例)。

全体に男女の接客場所が区別される点では、西部と共通するが、必ずしもランガールが利用されていない場合のある点で異なる。接客は、性別による区別をしつつも、主屋で行われる場合が多い。

4)イスラームの礼拝 ランガールのある屋敷地のうち、5例ではランガールで礼拝するが、うち4例は男性のみであり、女性は主屋内で専用の台を用いて礼拝する。西部のように、男女ともランガールを利用するのは1例のみである。また2例ではランガールを利用しない。

ランガールのない屋敷地では、男女とも主屋内で礼拝を行う。

3-6 考察

デサ・サングラ・アグンの住居空間の利用を見ると、就寝、接客については、屋敷地の規模に関わらず性別により主屋とランガールを明確に分けて利用するという、共通の傾向がある。食事の場所は他の生活行為と比較すると多様だが、ランガールやアンベルなどの半戶外空間でとられることが多く、性別による分離もある程度見られる。しかし、大きく異なるのが礼拝であり、男女にかかわらず、ほぼ必ずランガールで行われる。16世紀にイスラーム教がジャワより伝来され最初のイスラーム侯国が起こった西部は、イスラームが最も強く浸透した地域である。マドゥラ島の住居で唯一高床式の建物であるランガールは、礼拝の場となりイスラームと強く結合し、メッカの方向である屋敷地西側に残されたのではないかと考えられる。さらに重要な点と

表2 デサ・グル・グルにおける生活行為と居住空間の関係

1) 就寝場所			
就寝者	就寝場所	屋敷地番号(ランガール有り)	屋敷地番号(ランガール無し)
未婚男子	木造主屋	3,7	4
未婚男子	釜屋		9
未婚男子	ランガール		15
老人	主屋	2,8,14,15	5,6

2) 食事場所		屋敷地番号
食事場所		
共用釜屋		1,2,4,5,6,7,8,10,11,12,15
専用釜屋		2,3,9,13
釜屋前アンベル		14

3) 接客場所			
男性接客場所	女性接客場所	屋敷地番号(ランガール有り)	屋敷地番号(ランガール無し)
ランガール	アンベル	1,7,12	
アンベル	アンベル	5	9,15
アンベル	木造主屋内	3,6,13	2,8,10
アンベル	居間		4,11
居間	居間		14

4) 礼拝場所			
男性礼拝場所	女性礼拝場所	屋敷地番号(ランガール有り)	屋敷地番号(ランガール無し)
ランガール	ランガール	3	
ランガール	木造主屋内	1,7,12,13	
木造主屋内	木造主屋内	5,6	2,8,9,10,11,14,15
木造主屋内	アンベル		4

して、ランガールが保持されたことで、中庭まわりの空間を利用した生活の保存につながったことが指摘できる。

一方でデサ・グル・グルでは、生活の中心は、より主屋に移行している。ランガールの利用の仕方にばらつきがあることに顕著に現れているように、生活様式が変化しつつあると考えられる。また、そうした変化は、ランガールを欠く例、主屋後部に専用の釜屋が設けられる例のように住居の構成の変化にも現れている。

4. まとめ

- 1)マドゥラ島の屋敷地の構成は、インドネシア各地に見られる平行二列対面型の住居配置の原型をよく残している。本稿では具体的にその基本構成を明らかにした。
- 2)マドゥラ島の住居は主屋形式により、西部と東部の二つに地域類型される。西部はマドゥラ特有の主屋形式を持ち、東部はジャワと共通の架構を持つ主屋形式である。しかし東部は、ジャワでソントゥン・トゥングにあたる聖なる空間を持たない点が大きく異なる。
- 3)マドゥラ西部の典型として、デサ・サングラ・アグンの空間構成を平面類型によって明らかにした。また建物の所有関係、生活行為と居住空間の関係について明らかにした。
- 4)マドゥラ西部は屋敷地の規模に関わらず、生活様式は一定である。イスラームの導入が生活、住居様式の保持に影響したと考えられる。
- 5)東部は、生活の中心が主屋へ移行しており、付属屋を利用する平行二列対面型の住居配置の空間利用の特性が失われつつある。

注釈

- *1 マドゥラ島の住居は、隣接するジャワ島、バリ島などと同様に分棟式である。したがって本稿では主として就寝が行われる棟を指して「主屋」、それ以外の釜屋、家畜小屋、礼拝棟などを「付属屋」と呼ぶ。また「主屋」と「付属屋」を合わせて「住居」と呼ぶ。
- *2 集落の配置パターンに関する既往研究として、フレーザーによる参考文献19)がある。フレーザーは平行二列対面型の配置について、ドンソン文化に偏するものとするが、その名称についての統一的な表現はしていない。また考古学からは、渡辺による参考文献20)がある。渡辺は主屋の配列形式に着目し、群団形集落、線形集落など集落形式を五つに分類しているが、インドネシア等の地域的な枠組みは考慮されていない。しかし、主屋の列数を分譲軸とする渡辺の分類は、インドネシアの場合についても、平行二列対面型の下位分類を行う上では示唆的である。集落や屋敷地における最も大きな男女の空間分けを念頭におくと、主屋の列数により以下の特徴が挙げられる。トラジャ、トバ、ロンボク・スンババル等の一列型では、主屋が女性の空間、対面する寝食の下部に張られた露台が男性の空間として機能する例が見られる。一方、二列型では、スンバの場合のように主屋内で男女の空間分離を解決する例、アチェのメナウサー（折りの家）、ニアスの男性集会場などの独立の建物によって男性の空間を確保する例が見られる。
- 最近の研究動向では、インドネシア大学のG. チャジョノが中心になり編集を進めているIndonesian Heritageがあるが、Linear, Compound, Longの3形式が述べられるに留まっている（国立民族学博物館・佐藤浩司氏の御教授による）。
- *3 参考文献1)による。
- *4 マドゥラ島の文献目録として、I. Farjon, MADURA AND SURROUNDING ISLANDS, The Hague, 1980 があるが、建築学からの既往研究は、ほとんど掲載されておらず、現地調査の際の基礎的な情報（参考文献2）～5）に挙げたスラバヤ工科大学の報告書によった。特に文献2)はマドゥラ島全体をある程度網羅しており、情報の中心となった。また岡田恒男らによる「住宅の建物構造と居住形態における伝統と近代の葛藤/その活用可能性(2)」があるが、断片的でマドゥラ島全体についての視野に欠けている。
- *5 地域類型の抽出のために住居配置の実測を行った集落名とその位置は図9に示した。
- *6 参考文献17)における集落の様子は、Vollenhoven, 「閩領インド慣習法第一巻」、1918およびKuntowijoyo, Social Change in an Agrarian Society:Madura1850-1940,1980による。
- *7 本文中で記述したようにマドゥラの集落には、集落レベルでの明確な構成を規定するような規則や建物はない。田畑の中に単独で存在する屋敷地も多い。また、後のケーススタディの事例からも分かるように、生活のほとんどは屋敷地内で完結している。
- *8 参考文献18)によるが、クントウィジョヨの論考を基礎としている。
- *9 blimbingは英語のstar fruitsにあたる果物の名称である。奇棟や下屋の隅が面取りされた形が放射状に見えるためこのように呼ばれるのであろう。
- *10 ジャワの住居については既往研究は多いが、現地研究者によるものは、参考文献6)～9)が主なものである。文献6)は多くのスケッチと写真を交え、ジョグロの細かい分類と構造について説明がされているが、建物自体の物理的な記述に留まっている。一方で文献7)は、ジョグロの持つ象徴的な意味をヒンドゥーの世界観から明らかにしている。文献8)は、ジャワの住居が様々な対概念から構成されるにもかかわらず、中心性によってそれら

が統一されることを述べる。文献9)は、ジョグロ以外にも、ジャワの住居形式について広く触れている。

- *11 パンサール、ブンドボについては、スムラップ県デサ・グル・グルにおいて、部材寸法や建物全体の比例が、肘（アスタ）、尋（ドゥバ）指（ジュリ）足（ブチャ）などの人体寸法によって決定されていることが確認された。例えば、4本柱（ササカ）間のスパンの場合、桁行方向：梁行方向＝15ブチャ：10ブチャ など。また、パンサールの名称はジョグジャカルタのクラトン内の建物の名称にも使用されていることを付記しておく。
- *12 マドゥラ東部では、パムカサン県のかつての県知事の住居等においてもソントゥン・トゥングは見られなかった。調査範囲では貴族住居においても聖なる空間が全く欠如していた。
- *13 国立民族学博物館・佐藤浩司氏によって、北海岸のスムラップ県アンブンテン郡サロベン村には、相対方位を残し、絶対方位から見て左右が逆転する例が確認されている。またジャワとマドゥラでもともと海を意味したlor, laokが絶対方位では、ジャワとマドゥラで逆向きであり、それぞれ北、南として残っている。こうした絶対方位への移行過程・程度の違いにより、ジョグジャカルタには、相対方位の左右から見て、本来東に来るべき女性の空間が西にある住居の例が文献16)に報告されている。また文献8)でも釜屋が西に位置するとされる。クラトンとタマン・サリとの関係も同様である。
- *14 17世紀にマタラム王国の王宮の設けられた中部ジャワ・ジョグジャカルタ近郊のコタ・グデ地区について、ガジャマダ大学グループによる参考文献10,11)など一連の報告書の中で、コタ・グデ地区の住居配置が五つに類型され、複数棟並んだブンドボとダルム（主屋）が対面配置される例が示されている。また文献11)には、同様の住居配置が、ジャワ北部沿岸のクドゥスのカウマン地区にも見られるとの記述がある。
- *15 参考文献3)による。
- *16 通常、マドゥラ東部では、コンディは、パンサールの棟飾りを指す名称である。
- *17 ピンギール・パパスでは、RT8の住居配置を見る限り、釜屋の位置は主屋後部である。これに対して、ジョグジャでは釜屋は西側にある。本来左と結びつく女性の空間が、ジョグジャでは西（右）に位置することは、今後の検討を要するが、ジャワの王権の確立時期およびその北海岸から南海岸への位置の移動に関係する可能性がある。
- *18 サングラ・アグン・バラット Barat、サングラ・アグン・トゥングTengah、ソロ Sorok、ムラグン・スラタンMuragung Selatan、ムラグン・ウタラUtara、ムラグン・ティムールTimur、アンソカ Anesakohの7住区である。
- *19 参考文献12)による
- *20 HRAF(Human Relations Area files)には、マドゥラ人の親族原理は、双系制とある。
- *21 判断ができない屋敷地は、主屋が一棟のみの場合、一世帯のみしか居住していない場合などがある。
- *22 その他の場所で就寝する少数例には以下がある。
 - ・女性が釜屋で就寝する（2例）。屋敷地No.1では祖父母がランガールで寝起きしているため、さらに上の世代の曾祖母は釜屋で寝起きする。No.9は主屋を改築中であり、母と娘が釜屋で寝起きする。
 - ・アンペルのレンチャックで就寝する（3例）。No.14は、例外的にランガールがない。そのためアンペルのレンチャックを利用する。
 - ・未婚男子が主屋内にひとり、または複数で寝起きしている（4例）。No.2,14は、空き家となった出稼ぎ中の世帯の主屋で寝起きする例である。No.16,17はレンガ造の主屋内に間仕切られた個室で寝起きする例である。両者とも未婚男子の隔離就寝の特殊な場合である。

参考文献

- 1) R. Tan, Description of the Domestic Architecture of South Bali, Yale University, 1966
- 2) Institut Teknologi Surabaya(ITS), Arsitektur Traditional Madura, 1976
- 3) ITS, Bangunan Traditional Jawa Timur, 1974
- 4) ITS, Rumah Traditional Desa Pinggir Papis, 1983
- 5) ITS, Arsitektur Madura di Bangkalan, 1983
- 6) Hamzuri, RUMAH TRADITIONAL JAWA, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan,1980
- 7) J. Prijotomo, IDEAS and FORMS JAVANESE ARCHITECTURE, Gadjah Mada University Press,1984
- 8) G. Tjahjono, Center and Duality in the Javanese Dwelling, "Dwellings Settlements & Tradition", University Press of America, 1989
- 9) R. Ismunandar K, joglo, Dahara Prize,1993
- 10) Wondo-Sigit, KOTAGEDE-Between the Two Gates, Gadjah Mada Univ., 1986
- 11) Suryanto and Indano, KOTAGEDE - A traditional Settlement, Gadjah Mada Univ., 1987
- 12) Huub de Jonge, MADURA DALAM UMPAT ZAMAN,KITLV,1989
- 13) Roy Jordan, Fork Medicine in Madura,1988
- 14) Abudurachman, Sejarah Madura Seyayang Pandang,1971
- 15) Zein M. Wiryoprawiro, Arsitektur Tradisional Madura Sumenup, ITS, 1986
- 16) Gadjah Mada Univ., Kuliah Kerja Jogjakarta, 1975
- 17) 田中則雄, 「19世紀マドゥラの村落社会」『南方文化』, 天理南方文化研究会, 1985
- 18) 宮本謙介, 『インドネシア経済史研究』, ミネルヴァ書房, 1993
- 19) D. フレーザー, 『未開社会の集落』, 渡辺洋子訳, 井上啓院, 1984
- 20) 渡辺仁, 「狩猟採集民集落平面形の体系的分類」『国立民族学博物館研究報告11巻2号』, 国立民族学博物館, 1986

(1997年2月18日原稿受理, 1997年10月1日採用決定)